ことの始まり

昔々ではなくわりと最近、あるところに「イタチ村」という村がありました。村の住人はみな「イタチ」でした。狭(せま)い村ですが、大勢のイタチが住んでいました。イタチたちはみんな細長い体をしているので、狭くても平気なのです。

イタチたちはみんなそれなりによく働いていましたが、心の奥ではいつも「もう、働きたくないなあ。働かなくてもいいようにならないかなあ」と考えていました。そんなある年、イタチ村では悪いことばかりが続きました。きゅうりが不作だったり、桃(もも)や柿(かき)を猿(さる)に食べられたり、村の通貨「イタチドル」が暴落したり……。そのせいで、みんなの「働きたくなさ」はますます強くなりました。

そんなとき、他の村から妙なうわさが流れてきました。フクロウ村やアリ村やその他のあちこちの村で、何やら「便利なロボット」を作ったというのです。しかもそれらを使って、何やら「いい思い」

をしているようなのです。

イタチたちは最初、まったくそのうわさを信じていませんでした。なぜなら彼らは内心、他の村の動物たちをばかにしていたからです。でもある日、みんなで森に行ったとき、とんでもないものを見てしまいました。

大きな湖のほとりでのことです。イタチたちがそこで木の実を拾っていると、湖の方から妙な声が聞こえてきました。

なぞの声「さあみなさん、いよいよ目的地に到着です。このあたりは陸がきれいな人気スポットです。存分にお楽しみください」

声のする方を見ると、水際近くに船がありました。でもその船は逆さまにひっくりかえっている上に、ほとんど水に沈(しず)んでいます。船の底の部分がほんのちょっとだけ、水面から突き出ています。

突然バシャンという音がして、水の中から子熊(こぐま)のような影が飛び出し、陸の上に二本足で着地しました。よく見ると、その胴体(どうたい)、手足は機械でできています。つまり、ロボットなのです。頭の部分は、宇宙服のヘルメットのようなものが付いていて、その中には魚が一匹、すっぽりとはまっていました。ヘルメットの中には水が満たされています。

魚が少し体を動かすと、機械の胴体と手足がグググと動いて、ゆっくりと歩き出します。魚が体をちょっとひねると、方向を変えます。その後から何匹も何匹も、同じような機械の胴体に乗った魚たちが現れます。

魚その一「うわー、ここ、超きれいじゃん」

魚その二「空気の中ってこんなふうになってるんだね」

魚その三「ストレスも吹っ飛ぶなあ。無理して会社休んで来た甲斐(かい)があったよ」

魚その四「ライセンス取ってよかったわぁ。なんか私、魚生観(ぎょせいかん)が変わりそう」

そうやって魚たちはロボットの足で陸地を動き回り、ロボットの手で木の実をとったり、自撮り写真を撮ったりしているのです。イタチたちはとてもショックを受けました。なぜなら彼らは、魚たちのことを「水の外に出られない」「木の実もとれない」と、ばかにしていたからです。やがて、魚たちはイタチたちが見ているのに気がついて、口々に言います。

魚たち「うわあ、イタチの群(む)れだ」「ほんとだあ。湖から見るのと、ちょっと違うね」「空気の中で見ると、貧相な感じよね」

イタチたちはむっとしました。短気な若いイタチが魚たちに向かって走り出すと、彼らはびっくりして、あわてて船の方へ逃げ出します。魚たちの多くはロボットの体ごと湖に飛び込みましたが、

一匹だけ、飛び込むときにロボットから体が抜けてしまった魚がおりました。魚たちはさかさまの船で岸から離れて行きます。湖のほとりにロボットの体を一つ、ぽつんと残したまま。

　イタチたちはそのロボットを村に持ち帰りました。そしてさっそく、寄り合いを開きます。

「魚たちが、こんなロボットを作っていたなんて……」

　みんな、動揺を隠せません。そんなとき、一匹のイタチがこう言い出しました。

「ねえ、これを改良して、もっとすごいロボットにしない？　魚が陸を歩くなんていうのよりも、もっともっとすごいことができるのを作ろうよ」

　みんな、いい考えだと思いました。「魚のよりも、もっともっとすごい」というところがとくに気に入ったようです。

「じゃあ、どんなロボットにする？　このロボットは魚が乗るためのものだけど、イタチが乗れるようにする？」

　農民のイタチが意見を言います。

「そんなの、あんまりすごくないよ。それより、畑仕事ができるやつがいい。畑を耕（たがや）せって言ったら耕してくれたり、きゅうりを収穫しろって言ったら収穫してくれたり」

　行商をしているイタチが口を挟みます。

「畑仕事だけじゃなくて、商売もできないとだめだよ。それも、商売上手なやつがいいな。お金もってそうな相手には高い値段をふっかけたり」

　他の仕事をしているイタチたちも口々に意見を言います。

「イタチ村役場の仕事も大変だから、ぜひやってほしい。イタチ税を集めたり、村祭りを企画したり」

「イタチ新聞社も人手不足だから、新聞づくりもできるようにしてよ。自分で取材に行って、記事を書くの」

「イタチ村小学校も先生が足りないんだよ。ロボットに先生をやってもらえると助かるんだけど」

　そうやって話し合っているうちに、意見がまとまってきました。

「つまり、僕らはロボットにしてほしいことを言うだけで、あとはロボットが勝手にやってくれる。それが一番いいってことだね」

「それじゃあ、こちらの言うことが何でも分かって、何でもできるやつをたくさん作ろう。そしてそいつらに、何でもやらせるんだ」

「いいね。そうすれば、誰（だれ）も働かなくてよくなるね」

　イタチたちはみなこの計画にうっとりして、なんてすてきなのだろうと思いました。そんなロボットができれば、みんな一人残らず、王様のように暮らすことができるのです。

＊＊＊

　こうしてイタチ村の「すごいロボット計画」が始まったのですが、こういうお話、きっとみなさんも聞いた覚えがあると思います。こちらの言うことが何でも分かって、何でもできるロボット。そんなものができるかもしれないとか、そうなったら私たち人間の生活はどう変わる？とか、そういう話が今の世の中にはあふれています。

　ロボット技術が進み、そしてロボットの頭脳である人工知能技術が進んだことで、ロボットのできることは広がってきています。これからもますます広がっていくのは間違いないでしょう。でも、「こちらが何か言うだけで、何でも分かって、何でもできるロボット」は、本当にできるのでしょうか？　それを考えるためには、「言葉が分

かる」、さらには「意味が分かる」ということがどういうことかを考える必要があります。

私たちは普段から、「あの人が何を言っているかが理解できた」とか「あの言葉の意味が分からない」ということをよく口にします。しかし、自分がそう言うとき、どんな意味で言っているか、きちんと意識しているでしょうか？　実際のところ、私たちはさまざまなことを、「言葉が分かる」という便利な表現の中に放り込んでしまっています。それらを一つひとつ取り出してみないことには、「言葉が分かっているかどうか」という問題に答えを出すことはできません。

そして今、さまざまな人がさまざまな機会に、「言葉を理解する機械がとうとう完成した」とか、「今はできていないけれど、もうすぐできるだろう」とか、「機械には本当の意味で言葉を理解することはできない」ということを言っています。いったいどれが正しいのでしょうか？　ここでも、「言葉が分かる」「言葉を理解する」という言葉そのものがどういう意味なのかを考えなくては、その人たちの真意を知ることはできません。

この本では、「言葉が分かる」という言葉の意味を考えていくことで、機械のこと、そして人間である私たち自身のことを探（さぐ）っていきたいと思います。そこで中心となるのは、「言葉の意味とは何か」という問題です。最初にお断りしておきますが、実はこの問題には決着がついていません。長年、哲学や言語学で考えられている問題ですが、まだ解決していないのです。ですから、この本の中では、その問いに完全な答えを出すことはできません。

そのかわり、この本では次の問いについて考えていきます。

「言葉が分かった」と言えるには、少なくとも何ができなくてはならないか。
「言葉が分かる」ということは、少なくとも「何と違う」のか。

これらは「言葉が分かるとはどういうことか」という問題の一部にすぎません。しかし、それらのことを知るだけでも、みなさんが「人と機械の知性」について考えたり、またご自身の「言葉の使い方」や「理解の仕方」を振り返ったりする手がかりになると信じています。

この本では、考えるための「とっかかり」として、以下の各章で「何でも分かるロボット」を作ろうとする「イタチ村のイタチたち」のお話を披露（ひろう）していきます。イタチたちが出会うロボットや、彼らが作ろうとするロボットを通して、言葉を扱う機械のしくみを簡単に紹介します。そして「解説」ではさらにそれらを掘り下げ、「それらの機械が言葉を理解していると言えるか？」という問題を考えていきたいと思います。

一点、注意していただきたいのは、イタチたちのお話に出てくる機械や技術が、必ずしも「私たちの世界の最先端」を反映していないということです。くわしくは各章の「解説」をご覧ください。

みなさんは、イタチたちにどのような印象を持たれるでしょうか？　彼らの言うこと、また彼らが出会ういろいろな動物たちの言うことを、どう思われるでしょうか？　きっとさまざまなご感想があると思いますが、少しでも楽しんでいただけたら嬉（うれ）しいです。